豊臣秀長

ある補佐役の生涯

下巻

堺屋太一

文春文庫

文春文庫

豊臣秀長（下）

定価はカバーに表示してあります

1993年4月10日　第1刷

著者　堺屋太一
発行者　新井　信
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719315-9

文春文庫

豊臣秀長

ある補佐役の生涯

（下）

堺屋太一

文藝春秋

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

強きに流れる　9
補佐役の気働き　32
文治派の台頭　55
待つことの勇気　78
捨てる者の心　122
村重謀叛　144
補佐役の心得　163

不吉の彗星 191
変事 212
天王山 248
天下への坂 260
最後の苦闘 291
あとがき 323
解説 小林陽太郎 333

豊臣秀長

ある補佐役の生涯　下

強きに流れる

一

人間、どの道を選ぶにしろ大いなる成功を収めるには運がよくなければならない。だが、好運を得るためには努力と実力と忍耐が不可欠だ。成功者の好運は、運を逃さぬ絶え間ない努力と、運に乗って飛躍できるだけの実力と、運が来るまでの苦難に耐える忍耐との成果なのだ。

世に、努力もし、実力もあり、忍耐もしたのに、ついぞ運に恵まれずに人生を終えた不幸な人も数多い。しかし、努力と実力と忍耐を欠いて好運だけで大成功した人物は見当らない。

日本史上で最も激越な競争社会が成立していた十六世紀の戦国時代に大成した英傑たちの生涯を見る時、つくづく思うのはこのことである。この時代に名を成し家を興した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

人々はみな、大なり小なり好運児である。だが同時に、彼らはみな凄まじいほどの努力と優れた実力と驚くほどの忍耐を経ている。この乱世に天下統一の先鞭をつけた偉才、織田信長もまた、この例外ではない。

織田信長は、日本史上最もよく知られた人物の一人ではあるが、同時に最も多くの誤解を受けている男の一人でもある。この男の生涯は劇的な事件と苛烈な性格を示すエピソードに飾られているが、これらの事件やエピソードの間に長い苦しい努力と忍耐の期間があったことは忘れられがちである。

今、この物語が辿りついた元亀四年正月（一五七三・この年は途中で天正元年に元号が変る）、織田信長は最悪のピンチに陥っていた。少なくとも、信長を取り巻く敵方はそう信じていたに違いない。だが、このピンチは好運によって解消し、信長とその家臣団に飛躍のチャンスをもたらすのである。

浅井長政の反織田蜂起以来、織田信長の敵は増える一方だ。朝倉・浅井の敵対行動は衰えることがなかったし、六角氏は再度離反した。比叡山は露骨な利敵行為をなし、三好三人衆はまたしても摂津に現われた。全国に多数の城塞化した寺院と強力な武装信徒の集団を持つ一向宗本願寺も組織をあげて反抗をはじめた。そして、これら総ての背後には、「内なる敵」足利将軍義昭の陰険な策謀の手が動いていた。信長の敵は四隣にいた。領内各地に散在した。そして京の中心・二条城にもいた。彼らは十分な武力と宗教

的粉飾と伝統的権威とを兼備していたのである。

これに対し、信長の味方は減少し動揺し臆病風に吹かれて立ちすくんだ。上洛以降に帰属した畿内の大名の多くは、旗幟を不鮮明にして事態を傍観し出した。一時は、八万の大軍を動員できた信長が、今や信頼できる部隊といえば織田家直属の三万弱と徳川家康の八千人ほどになっているのである。

こうした中で、織田信長とその家臣たちは実によく戦った。彼らは、姉川で朝倉・浅井の連合軍を破り、摂津に走って三好衆を攻め、本願寺を囲み、近江に戻って志賀に防衛線を敷いて京洛を守り、南近江の六角氏と佐和山の磯野氏を降した。さらに比叡山を焼き討ちし、金ケ森の寺領を征し、北近江と湖西の諸城を固めて濃尾と畿内を結ぶ回廊地帯を確保した。その間に伊勢長島と近江の小谷城周辺で何度かの激戦を繰り返した。いかに戦国乱世とはいえ、この三年間の織田軍ほど休みなく動き、絶え間なく戦った軍隊は例がない。

織田家の部隊がこれほどに働き続けられたのは、勿論、主将・信長の精神的頑強さと苛烈な性格、これに従う部将たちの出世欲と勤勉さのためだが、同時に、この頃既に織田家の将兵の中核が兵農分離を完了した専業武士であったという事実も見逃せない。

永禄・元亀のこの当時、他の主要な大名――越前の朝倉、甲斐の武田、越後の上杉、関東の北条、中国の毛利ら――の軍はまだ、半農半武の土着農民兵を主体としていた。

高位の部将たちも総て各郷村の豪族である。彼らは農耕を放置できないから、軍事行動の回数と期間が限られた。遠征の距離にも滞陣期間にも限度があった。

これに対し、織田信長の部隊は農地を持たない専業武士である。信長お気に入りの部将たち――柴田勝家、丹羽長秀ら――も、早くから城下に移住し郷村とは断ち切れている。滝川一益、木下秀吉、明智光秀ら、元々郷里のない流浪人から一軍の将に育ったものも多い。後顧の心配のない彼ら、戦争のプロフェッショナルは四季を通じて戦場に出られた。動員も速いし滞陣期間も長い。敵の部隊が農作業に戻った時期を捉えて攻撃することもできる。

この時期、多数の敵を持つ信長が、各個撃破に相手を攻め潰せたのは、こうした麾下（きか）軍隊の性格による所が大きい。信長が織田家の家督を継いで以来、伝統と格式を尊ぶ古参家老の反対を押し切って築き上げて来た新型兵団の威力が、今、この男の危機を救っていたのである。

しかし、これほどの奮闘にもかかわらず、信長の敵は減らなかった。朝倉・浅井は健在であり、三好衆は摂津に居座り、本願寺はますます敵意をつのらせていた。そして何よりも、足利義昭の策謀はいよいよ大きく活発になりつつあった。

元亀三年四月には、この将軍の煽動によって、信長に帰属していた三好左京大夫義継と松永弾正久秀とが叛旗をひるがえすという事件さえ起きた。この事件は、信長に脅迫

された義昭が仲裁に立つことによって元通りの形で収まるが、信長としては床の下に火薬を仕掛けられたような気色の悪さが残ったことであろう。

もっとも、信長の敵も、信長以上の苦しみと苛立ちを味わっていたに違いない。浅井長政は領土の南半分と有力家臣の多くを失い、小谷城に追い込まれていたし、朝倉はたび重なる出兵の経済的負担にあえいだ。摂津に上陸した三好衆も福島、野田の拠点を守る以上のことはできない。金城湯池と思えた領国阿波が南に興った土佐の長宗我部元親（ちょうそかべもとちか）に侵されそうだったからだ。強大な組織力を誇った本願寺にも政戦両面で齟齬（そご）があった。石山本願寺や長島願証寺の奮戦を横目に畿内や濃尾の末寺はほとんど戦おうとはしない。その上、織田方の北近江での交通封鎖で財政的な窮乏が著しい。門徒衆の多い北陸からの物と人との流れが止った結果、総本山の石山本願寺が頼りにできるのは、摂津、和泉の一部と紀伊の門徒衆だけであった。

反織田大同盟の謀主、足利義昭の苛立ちも大きかった。これほどの大同盟が造られたこと自体、この男の策略の妙ともいえたが、実際の戦況は予期通りではない。同盟軍の動きは一致せず、一斉攻撃の形がとれない。義昭自身の手元には期待した兵力が集らない。それどころか、かつての家来、明智光秀や細川藤孝、荒木村重らは信長の家臣になり切ってしまった。このため義昭は、信長の脅迫に屈し、自ら煽り立てた叛乱の調停役に立たねばならない有様だ。今日流にいえば「マッチポンプ」の役回りで、足利将軍の

信用と権威は著しく傷ついてしまった。

〈これではいかん……〉

足利義昭は、互いに決め手のない耐久レースに耐えかね、情勢を一変させる大技をねらった。外周部の大勢力に上洛させることである。

足利義昭は各地の大名たちに「上洛して織田を討て」と命じる御内書を乱発した。だが、どこの大名も内部事情と四囲の敵対勢力との関係で容易に動こうとはしなかった。

ところが、元亀三年に至って情勢を一変させる大事件が起った。強兵を以て知られる甲斐の武田信玄が遂に立ち上ったのである。

二

武田晴信――のち入道して信玄――は、一五二一年に生れ、四一年に武田家の家督を継いでいる。年齢では十三歳、領主としては八年、織田信長より先輩に当る。

この男の五十二年の生涯は、詐術と粉飾と残酷な野心に満ちている。彼は甲斐武田家の家督を継ぐために父を追放して窮死させた。中信・諏訪の地を得るために人の好い義兄を謀殺した。今川領の駿河を奪うためには自分の長子・義信を殺した。今川から妻を娶(めと)っていた義信が駿河攻撃には邪魔だったからだ。

これほどの男だから、上洛を果し天下を制したい野心も激しい。永禄十年には、義信に代えて跡取りにした次男の勝頼に織田信長の養女をもらい受けて織田と同盟し、徳川家康との間にも大井川を境として今川領を分捕りにする協定を結んだが、これも長続きはしなかった。織田信長が先んじて上洛を果したと聞くと、心安らかではおれなかったのだ。徳川家康が今川氏真の最後の拠点、掛川城を謀略によって奪ったことも不快だった。家康は、「遠江一国を譲れば北条と協力して武田から駿河を取り返してやる」と持ちかけて氏真を納得させたというのである。

武田信玄が、いずれは織田・徳川を討たねばならぬと考えたのも無理はない。ちょうど、元亀元年、勝頼の妻になっていた織田の養女が病死し、両者の縁は切れる。信長からはすぐ、武田の娘を長男の嫁に欲しいといって来たが、信玄は黙殺した。既に信玄の天下制覇の決意は固い。足利義昭からも上洛を勧める御内書が来ている。甲斐源氏の家門にかけても、信長如きにいつまでも天下をまかせるわけにはいかぬ。

しかし、武田もすぐには出られない。北の上杉、東の北条が気になった。織田・徳川も抜け目なく、この両家と接触して対武田同盟を形成していたのだ。信長と信玄は、互いに相手を包囲する外交戦をも戦っていたのである。

武田信玄は、しばしば遠江、三河に進出し、徳川を攻めたが、いくつかの小城を占領する以上のことはできなかった。信玄の戦術は、山岳地帯の間道を走って敵地を急襲し、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton